

いと小さき花を
つけたり

築地の海は

雲母色の靄

深く立ち

こめて

朝冷えは膚に

沁む

袖かき合わせて

ふとかへり見る

いぎりす巻の女の瞳に

澄むや秋

紫陽花舎主人

余談になりますが私が子どもの頃、この作品を初めて観たときの第一印象、何処に目がいったかと申しますと、あの黒い羽織からチラリとみえる「赤」の色の鮮烈さに目をうばわれ「清方はこんな細部にわたってまで気を配るのだな」と当時思ったのをはっきりと覚えております。枯れて地におちた朝顔。ホテルから連想の垣根。遠く朝もやに霞む帆前船……。それがその後の清方の画をみるときは無論のこと、脇をみることにへの大切さを教えられたのがこの《築地明石町》でございます。私がこれまで胸にしまっておいた「清方の見方」を吐露したものでございます。

更にこの作品イメージをふくらませて下さった当のご本人、江木ませ子様の御令嬢妙子様（註3）が昭和のはじめパリに於いて、海を渡って展示されていた《築地明石町》をご覧になって「註3」異郷の地で思いがけず母に逢ったよう」と感想を下すつたやにも聞き及ぶこの作品も待ちに待っていて下さった皆様にご堪能いただけるような「保存の美しさ」が継続されたまま皆様の前へ再登場出来たことにも改めて御礼を申し上げます。

最後になりました。永い間お待ちいただいたファンの皆様方どうかごゆっくりと久々の「いぎりす巻」を目に焼きつけてお帰り下さいまし。

（鍋木清方孫）



江木ませ子氏肖像
安藤萬喜氏提供

おばあ様のこと

安藤萬喜

相州片瀬、いまの藤沢市に祖母江木万世は、お手伝いのかねやと静かに暮らしていた。ちょうど、二二六事件の起きた頃、私の父は、軍隊に入り、一歳の私を抱えた母は、東京から祖母の元に引越した。

畑の中の小高い丘の上に立つ家、庭を下って行くと林の中に沢の水が流れて、沢蟹が芝生まで登って来るような所だった。洋風の玄関を入ると、左に父の書齋があり、真ん中の廊下をばさんで庭側に座敷が二間と茶の間が並んであった。茶の間の前は、台所で裏庭に出られるようになっていた。五月頃には祖母といちごを摘みに出て、朝ごはんの時に食べたことを思い出す。台所の先には、渡り廊下があり、風呂場へとつながっていた。廊下の下の砂利には、時々、蛇の抜け殻があり、お守りだと大切にしまっていた。芝生の庭の中央には、花壇があり、バラやコスモスが植えられていた。祖母はコスモスが大好きだった。やがて、私に弟が生まれ、父は軍隊で家にはおらず、母は子ども二人を連れて、実家のある小田原へと引越すこととなった。私は、その後も、度々、一人で片瀬の祖母の所に泊りに行っていた。祖母の描いた草花が一面にある襖の茶の間で御飯を食べた。かねやと一緒に、江の島や由比ヶ浜に遊びに行ったこともよく憶えている。

祖母万世は三十五歳で未亡人であった。祖父定男は、江木家の一人息子で、実母を早くになくし、義母が悦と言い、祖母万世の長姉であった。姉の家に女学校時代からよく出入りしていた万世は、当時、御茶ノ水女学校の出身で、大変な美女ということでも、男子学生の間では評判であったらしい。やがて、定男と万世は相思相愛の仲となり、定男が帝国大学の学生であった二十歳で結婚し、万世にとって実の姉が姑となるやっことしい関係が出来た。定男は大学卒業後、官吏となり、農商務省に勤めた。定男と万世の間には、娘妙子と双子の男の子、文彦と武彦が生まれた。私は文彦の長女である。

やがて、アメリカ合衆国のサン・フランシスコで開催されたパンパシフィック万国博覧

会に出向していた定男は、帰国後、喉頭結核に冒され、逗子で祖母の看病を受けながら、子どもたちとは離れて過ごすことになり、わずか三十五歳で帰らぬ人となった。江木家は定男の父保男の代から新橋で写真館を営み、明治、大正、昭和と弟子も沢山出て、かなり有名な家であったので、定男が亡くなっても、悦と万世は写真館経営に苦勞しながらも、生活に困らなかつたと思われる〔註4〕。

祖母は趣味人でもあり、三味線や長唄もたしなみ〔註5〕、歌舞伎にもしばしば足を運び、十五世市村羽佐衛門の大ファンでもあった。また、絵心のあった人で、鐫木清方画伯の元に稽古に通っていた。

清方画伯の著書『続こしかたの記』に次のような文章が残っている。

遠く回想する明石町の立ち置めた朝霧のなかに、ふとこの佛が泛ぶと共に、知人は妻の同窓で、夫君定男さんも知己なり、泉君に頼まれて、画の指南もした間柄なので、画室に招いて親しく面影を写しとどめた〔註6〕。

とある。そして、やがて『築地明石町』という清方画伯の代表作の一つが出来た。

若い未亡人の祖母には、祖父亡き後、かなりの崇拜者がいた、と父から聞いたことがある。上野の国立博物館の前庭で出征した父のために、四葉のクロ・バーを摘む姿を見て、恋文を書いた方の話など色々あったようだが、再婚することはなかった。祖母の周辺には、色々ことが起こっている。父の姉江木妙子と母万世のことは、祖父の友人であった中勘助なかかすけ氏の小説の中ししばし出て来て、後に富岡多恵子著の『中勘助の恋』〔註7〕という著書の中で書かれているが、私の見知っている祖母像とは少し異なる気がする。また、晩年の祖母については、長谷川時雨著『近代美人伝（下）』によると、祖母の異母姉にあたる江木欣々女史（江木榮）の章に万世のことを次のようにうつしている。

二、三日たつて、相州片瀬の閑居に、ませ子さんの室にわたしは坐つた。

ませ子さんも、清方画伯が「築地河岸の女」として、いつか帝展へ出品した美しい人である。病後とはいえ、ふと打ちむかつた時、欣々さんにこうも似ていたかと思ふほど、眼と眉がことに美しく、髪が重げだつた。この女が、大学出の子息が二人もあつて、一人は出征もしていられるときくと、嘘のような気がするほど、古代紫の半襟と、やや赤みの底にある唐繻子の帯と、おなじ紫系統の紺ぼいお召の羽織がいかにも落ちついた年頃の麗々しさだつた〔註8〕。

祖母が亡くなつたのは、昭和十八年五月十四日で、第二次世界大戦が始まつて間もなくであつた。祖母を宝物のように愛していた父の悲しみをみて、小学生の私も、とても寂しい思いをした。さいごにお棺の中でお顔を見て、いまの私の年齢よりはるかに若い祖母は本当に美しかった。享年五十八だつた。

私にとっては、七五三には着物を、お節句には雛人形を送ってくれた、やさしい祖母であつたが、若い未亡人として子どもたちを育て、一人の女性として趣味も沢山持ち、交友関係も広い、立派な女性であつたと思つている。そして、『築地明石町』のモデルとなつたことで、永遠に多くの人のマドンナであり続けるのであろう。

（江木万世（ませ子）孫、箱根・嶽影松坂屋主人）

後記・註 《築地明石町》を描いた鐫木清方のご令孫根本章雄氏と、モデルとなつた江木ませ子（万世）のご令孫安藤萬喜氏に、ご親族ならではの思い出の執筆をお願いしました。以下に註として出典などを補足します。（美術課主任研究員 鶴見香織）

註

1 《築地明石町》が戦後初めて展覧会出品されたのは一九五六年に朝日新聞社の主催で銀座・松屋で開催された「明治大正昭和美人画名作品展」を含め、一九七五年までの約二十年間に、『築地明石町』に限れば展覧会出品は八回実現したが、いずれも会場は東京都内に限られた。

2 「回想の清方」その三展には『築地明石町』『新富町』『浜町河岸』の三部作と、『築地明石町』の大小絵が出品された。これ以降、三部作は所在不明となつた。

3 鐫木清方『続こしかたの記』中央公論美術出版、一九六七年、一六八頁にも記されている。猪谷妙子が見た展覧会は一九二九年にパリのジュ・ド・ポームで開催された「パリ日本美術展覧会」。

4 江木写真館は一八八四年開設。悦は淡路町本店を人に譲り、銀座（新橋）店を経営した。

5 長唄協会の会員でもあり、『長唄協会会報』第十一号、一九二八年十一月に文章を寄せている。

6 前掲『註3』、一六七頁。

7 日記体の随筆「郊外」その二「郊外」その二「孟宗の蔭」中勘助全集 第四卷（角川書店、一九六二年）、「しづかな流（二）」「街路樹」同 第六卷などに登場する。富岡多恵子「中勘助の恋」（創元社、一九九三年）は中勘助の評伝。

8 長谷川時雨著、杉本苑子編『新編 近代美人伝（下）』岩波文庫、一九八五年、二五四頁。